

ギフテッドの概念と日本における教育の可能性

林 睦

ギフテッドの概念と日本における教育の可能性

林 睦

The Concept of Gifted Children and How to Explore Possibilities of Educating them in Japan

Mutsumi HAYASHI

キーワード：ギフテッド 2E ギフテッド教育

1. ギフテッドの概念

「ギフテッド」とは、英語のgiftedという語に由来しており、天賦の才能をもつ人々という意味である。先天的に平均よりも顕著に高い能力を持っている人のことを指し、どの国や社会にも一定数存在すると考えられる。アメリカ連邦政府の定義では、ギフテッドの子どもとは、「知性、創造性、芸術性、リーダーシップ、または特定の学問分野で高い達成能力を持ち、その能力を発揮させるために通常の学校教育以上の活動や支援を必要とする子ども」を指す¹⁾。National Center for Education Statistics のデータによると、全米の学齢期の子どもの6.7%がフテッドであるとされている²⁾。

では、ギフテッドとは具体的にどんな子どもを指すのだろうか。まずは、ギフテッドの一般的な特徴について、アメリカのギフテッドのガイドブックを参照してみることにしよう。

表1. ギフテッドの一般的な特徴³⁾

- ・ 幼少時からの並外れた集中力
- ・ すばやく学ぶ、理解する
- ・ 記憶力がよく、たくさんの情報を持っている
- ・ 年齢の割に数多くの難しい語彙を持ち、複雑な文を構成できる
- ・ 言葉のニュアンスや比喩を深く理解しており、抽象的な概念を理解することが得意
- ・ 数字やパズルが得意
- ・ 幼少時から文字の読み書きを教えなくても自分で学んでしまう
- ・ 感情が並外れて深く、反応が強く情熱的、非常に繊細
- ・ 抽象的、複雑、論理的な思考を好み、洞察力が鋭い
- ・ 幼少時から正義を重んじ、理想主義者である
- ・ 社会問題、政治に興味があり、不正を批判する。権力に反発する
- ・ 強い集中が長く持続する
- ・ 妄想や白昼夢にふける
- ・ 他人の不正や処理スピードが遅いことが許せない
- ・ 練習や繰り返しをあまりせずにすぐに覚えることができる
- ・ 教えられたことを超えて質問する
- ・ 幅広い好奇心（非常に興味があることがひとつの分野のみのこともある）
- ・ 非常に深い興味をもつ。質問が止まらない
- ・ 実験的にやってみることに興味があり、人どちがった方法で物事を解決する
- ・ 普通でない方法で考えや物事を結びつける（発散的思考）
- ・ 鋭く、時に並外れたユーモアのセンスがある。特にダジャレなど
- ・ 複雑なゲームやスキームで、物や人を組織したいと考える
- ・ 幼少時に空想の友だちがいる。いきいきとした想像力を持つ

これらの記述からは、ギフテッドの優れた面についての特徴が並んでいて、何ら問題がないように見えるかもしれないが、ギフテッドの子どもたちは一般的な優秀児とは異なった独特で強固な性質を持っており、特別な支援を必要としていることもある。その理由がわかるように、ギフテッドの主な特徴についてももう少し丁寧に説明していくことにする。

まず、定型発達の子とも違って、ギフテッドの子どもは非同期発達である。語彙や認知能力等が周りの子どもたちよりもはるかに発達している一方で、精神面、社会面が弱い傾向にあるため、同年代の子どもに溶け込みにくい。学校で理解を得られなかったり、不登校になったりすることもしばしば見られる。精神と身体、知能と感覚の発達の非同期だけでなく、認知のアンバランスを持つ場合もあり、生きづらさを抱えていることもある。

過度激動もギフテッドの主な特徴のひとつである。過度激動とは、*overexcitability* の日本語訳で、通常 OE と略される。ポーランドの精神科医で心理学者であったドンブロフスキ (Kazimierz Dabrowski 1902-1980) が提唱した概念で、ごく簡略化して言うならば、日常の刺激を過敏に強烈に感じとることである。たとえば、嗅覚や味覚、聴覚、触覚などの感覚が過敏で不快感が強かったり、喜びも悲しみも楽しさも苦しさも人一倍感じてしまったりする。これは高い能力と関わって、ニューロンの感受性の増加による刺激への反応の高さに起因しており、感覚過敏や精神的な刺激に強く反応する。ドンブロフスキは過度激動を「悲劇的なギフト」と呼んだが、過度激動がギフテッドをより高度に成長させる契機にもなりうる⁴⁾と述べている。

完璧主義もギフテッドによく見られる特徴である。完璧主義であるために、完璧にできないならば物事に取り組もうとしない、途中でやめてしまう、取り組む前からプレッシャーにさいなまれるといった状況が起こりうる。また、自己評価が低い傾向にあることも指摘されており、高い成果をあげていながらも、その成果を喜ぶよりも、できなかったことにばかり意識が向いたりする。その一方で、完璧主義が素晴らしい成果の原動力になるとも言える。

孤立もギフテッドをとりまく大きな問題のひとつである。ギフテッドは同世代の子どもたちと語彙や知能、精神年齢や感じ方が異なったりするために、友だちができにくかったり、周囲の子どもたちから孤立したり、いじめの対象になったりする場合もある。

学校のカリキュラムや評価の不適切さ、周囲の無理解などによって、能力と実際の成績に大きな差があるアンダーアチーブメントも容易に起こりうる。このことはギフテッドのもつ性質に起因している。ギフテッドは普通の子どもよりも数段理解が早いために、すでに理解したことを繰り返すことを極端に嫌う傾向がある。よって、計算や漢字などのドリルの繰り返しを嫌ったり、わかりきったことを丁寧に書く手間を惜しんだりする。日本の小学校はドリル系の宿題が多いので、宿題を極端にやりたがらなかったり、きちんと提出しなかったりする。そのほかにも周囲からの孤立を避けるために同級生に同化しようとしたり、自分の能力を隠したり、教師との相性によっては反抗して勉強しなかったり、完璧主義によって課題等に手がつけられなかったりと、ギフテッドがもつさまざまな性質によって能力と成績の乖離や学校での問題が引き起こされやすい。

このように高い能力に恵まれながらも、独特な性質によって生きづらさを抱えやすいために、自己肯定感の低下が起こりやすく、うつ状態にも陥りやすい。だからこそ、ギフテッドの子どもには適切な支援が必要なのである⁵⁾。

日本の教育、医療の現場ではギフテッドの認知度は非常に低く、発達障害と誤診されることもしばしばである。しかし、ギフテッドとは発達障害ではない。そもそもギフテッドとは教育用語であり、医療や診断に使われる用語ではない。ギフテッドの中には、2E (Twice Exceptional : 二重に例外的なという意味) と呼ばれる発達障害や学習障害を併せ持つ場合もある。なお、アメリカでは 2E の割合はギフテッド全体の 20%以内と報告されている⁶⁾。ギフテッドの認定、教育の歴史が長いアメリカでさえ、ギフテッドが発達障害と誤診されることが社会問題となっている。それは、ギフテッドの特徴が時に ADHD や ASD の特徴と見分けが付きにくい場合があるからである。日本ではギフテッド

の認知度が非常に低いために、発達障害の枠のなかに無理やり押し込められることも多く、自尊心を傷つけたり、やる気をなくさせたり、潜在的な能力をつぶしてしまいかねない状況にあることは、非常に大きな問題だと考える。だからこそ、まずはギフテッドの正しい認識を広める必要がある。

日本の社会に認識を広めるためには、適切な用語を使用することが重要である。筆者は、先に述べたような先天的な特徴をもつ才能児を表す専門用語である *gifted* をそのままカタカナで書き下して「ギフテッド」という用語を使用することが、新たな概念として日本人にそのままとらえられやすいのではないかと考える⁷⁾。これまでは、才能児、英才児などの言葉が使われていたが、日本語に訳すことによって才能、英才という語に対する一般的なイメージが先行してしまい、ギフテッド固有の特徴がそのまま受け取られにくいのではないかと考える。また、ギフテッドを天才と訳すのも本来の意味と異なってきてしまうであろう。ギフテッド=天才ではなく、天才と呼ばれる人が調べてみたらギフテッドの特徴を持っていたということは有り得るだろうが、ギフテッドは皆、天才であるとは言えない。また、日本の平等主義的な社会風土のなか、先天的な才能児の存在を認めることへの抵抗を懸念して、ギフテッドという考え方自体が日本に浸透しにくいという意見もあるだろうが、もはやそのような時代ではないと筆者は考える。現に2011年頃から、アメリカ在住の日本人で、子どもがギフテッド教育を受けている保護者らがアメリカのギフテッド教育について紹介したことで、インターネット上で「ギフテッド」という用語が広まっているという現状もある⁸⁾。また、能力は高いが困り感の強い子どもを持つ保護者らが「ギフテッド」をキーワードにアメリカや日本の情報を必死に探そうとしたり、親の会ができはじめている状況にあり、この時期にギフテッドの正しい認識について情報を提供する必要性を感じる。これらの理由から、「ギフテッド」という用語を使って、その概念を日本に広め、ギフテッドの子どもへの認知や適切な対応を呼びかけることが必要であると考えられる。

2. 日本におけるギフテッド研究の現状と課題

アメリカのギフテッドの概念について概観したところで、日本におけるギフテッドをめぐる現状について、研究、教育の側面からみていくことにしよう。本節では、研究の現状について考えてみたい。

日本におけるギフテッド研究は、数人の研究者が知見を発表している状況にある。CiNii で「ギフテッド」と検索すると、論文は14件ヒットするのみであり、ギフテッドという言葉を使わずに研究しているものを合わせても、限られた研究者の著作がみられるだけである。

日本において早くからアメリカのギフテッド教育を紹介してきたのは、松村暢隆（発達・教育心理学）である。松村はアメリカのギフテッド教育研究のメッカであるコネチカット大学のレンズーリのもとで学び、早くからアメリカのギフテッド教育の紹介を行ってきた。彼の主著『アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援』（2003）では、アメリカの才能教育の歴史、定義、知能・才能の評価、教育プログラム（早修、拡充など）について詳しくまとめている。松村はアメリカのギフテッド教育に関する数多くの著作群のなかで、才能教育、才能児、英才といった言葉を敢えて選んでおり、括弧書きで英語を使う時以外は極力ギフテッドという言葉を使っていない。松村の最近の研究は、2E の子どもが中心であり、2E 教育という用語を提唱している⁹⁾。

心理学の研究者であり、特別支援教育の現場で長年にわたって臨床にも携わってきた小泉雅彦は、日本でもよく使用されている知能検査である WISC-IV をツールとして、知的側面からギフテッドを同定しようとしている。日本にはギフテッドを認定する基準がないので、『日本版 WISC-IV 理論・解釈マニュアル』¹⁰⁾ の臨床群研究における知的ギフテッドを指標としながら、認知特性を解明しようとしている¹¹⁾。小泉は実際に学童期から成人するまで、困り感をもつ知的ギフテッドらと丁寧にかかわり、それらのケースをモデルとして研究に生かしている。ギフテッドの子どもや保護者と直接かかわってきた小泉は、臨床的な観点から子どもや親のニーズをよくとらえている。このほかには、杉山登志郎、岡南、小倉正義による共著¹²⁾や高知大学の松本茉莉衣、是永かな子らのギフテッドの特別な教育

的ニーズに関する論文、諸外国のギフテッド教育に関する論文も見られる。

日本でのギフテッド研究は、現在は 2E の研究が中心であり、主に日本 LD 学会で研究が発表されている状況である。ギフテッドの認識も広まっておらず、ギフテッドの認定も行っていない日本では、すでに特別支援教育の枠組みのなかにいる子どもたちが対象になりやすいことは理解できるし、2E の子どもへの支援や教育も大切な領域であると考ええる。しかしながら、2E の研究や教育だけでは、当然のことながら障害のないギフテッドは対象外となる。近年、ギフテッドの親の会が形成されつつあるが、その中にはかなりの割合で障害のないギフテッドと思われる子どもたちが存在し、支援を求めている。このことから、2E だけでなく、ギフテッド全体を対象とした研究や教育が必要であると考ええる。

3. 日本におけるギフテッド教育の可能性

最後に、日本におけるギフテッド教育の可能性について、事例を挙げながら考えていきたい。

アメリカには、ギフテッドの認定基準¹³⁾があり、被認定者は特別な教育プログラムを受けることができる。そのための法令やガイドラインも、国及び州レベルで存在している。ギフテッド教育のはじまりをたどっていくと、1900 年頃まで遡るが、具体的な法や行政的な基盤が整備され、研究者や教師、行政職が協力して、盛んに教育プログラムが開発されていったのは 70 年代であった。現在では、公立、私立校からオンラインスクールに至るまでギフテッドの専門教育が存在するほか、ギフテッド教育の手法を生かして、すべての子どもの才能を伸ばそうとする教育へと発展してきている。また、ホームスクールで学ぶギフテッドも増えてきており、ホームスクーラーのためのサポートまで充実している。アメリカの公教育のなかで、よくあるギフテッド教育の方法は、取り出し方式、エンリッチメント方式、加速方式などである。取り出し方式とは、普段は一般のクラスで学びながら、一定の時間はギフテッドの子どもを集めたクラスで学ぶ方法である。エンリッチメント方式は、基本的には一般の生徒たちと同じクラスで過ごすのが、特別な課題を与えられたり、コンテストに参加したり、課外活動など、本人の能力が発揮できる場が設けられている方法である。加速方式は、飛び入学や飛び級のことである。そのほかには、夏休み等にギフテッド向けの集中講義やキャンプなどのサマースクールが全米各地で開催されていたりもする。

アメリカ以外でもほとんどの先進国でギフテッド教育は存在するが、これまで日本にはなかった。今月（2017年9月）から渋谷区でギフテッド教育が始まった。これは日本初の公立学校におけるギフテッド教育のはじまりである。渋谷区は、ギフテッドを「全般的または特定の分野で高い能力を発揮する子ども」と定義しており、対象者は小学3年生から中学3年生に在籍し、(1) 特別支援教室拠点校の巡回指導員による指導を受ける児童のうちニーズのある児童、(2) 情緒障害等通級指導学級に在籍する生徒のうちニーズのある生徒、(3) 長期欠席児童・生徒のうち本人と保護者がプログラムへの参加を希望し校長がこれを認める者である。2017年9月1日に渋谷区が開催したキックオフイベントで公表された内容によると、プログラム内容の開発に協力するのは、2014年から「異才発掘プロジェクト」を実施している東京大学先端科学技術研究センターである。このプロジェクトは、突出した能力を持ちながら、現在の学校教育になじめない子どもたちを対象としたものである。（このプロジェクトでは敢えてギフテッドという用語は使用されず、もう少し広い範囲の子どもたちを対象としていた。）今回の渋谷区のギフテッド教育プログラムでは、2017年度は、2017年9月25日から翌年2月27日までの8回、トップランナーによる講義を予定しているほか、参加希望者の数やニーズに合わせて、その他のプログラム内容も調整していく予定としている¹⁴⁾。この渋谷区での事例は、日本の公教育における初のギフテッド教育の試みとして、日本のギフテッド教育の歴史に残る記念すべき出来事であろう。しかしながら、このプログラムは「ギフテッド教育」という名のもとに試行錯誤しながら教育内容をつくっていくというものであり、このプログラムがすなわち日本のギフテッド教育ではないと

考える。けれども、渋谷区がこのプログラムの実施にあたって、各報道機関への広報に「ギフテッド教育」という用語を用いたことは、ギフテッドやギフテッド教育という用語が社会的に広く認知されるひとつのきっかけとなったにちがいない。渋谷区では、公文書にもギフテッドという用語を用いている。平成29年2月に作成された「平成29年度渋谷区 当初予算案の概要」のなかで、「課題を補う、あるいは克服することのみならず、キラリと光る特別な才能をもつ子ども（いわゆる「ギフテッド」の子ども）を伸ばす新たな特別支援教育を試みる」¹⁵⁾と明記されている。渋谷区の先駆的な試みが、全国の他の自治体にも広がっていくことに期待したい。

4. おわりに

現在、日本では、公立学校でのギフテッド教育が実験的に始まったり、ギフテッドの親の会が発足したりと、一部の人々によってギフテッドという言葉や概念が使われはじめ、具体的な支援を模索し始めた状況である。しかし、まだ十分な広まりを見せているとは言い難いだろう。今後、ギフテッドへの認識が日本の社会に広まり、教師や保護者、研究者や行政職がギフテッドの存在と特徴を知ることがまず大切であると考えられる。さらに、2E だけでないギフテッドの研究や支援も視野に入れる必要があると考える。そのためには、アメリカのギフテッド教育から学ぶだけでなく、日本の教育制度や子どもの状況を鑑みた日本版ギフテッドの定義や認定基準が必要な時期にきているのではないだろうか。そのために、筆者は今後、日本のどこに、どのくらいの割合で、どのようなかたちでギフテッドが存在するのか、どのような特徴をもち、どのような支援を必要としているのかを調査し、研究を進めていきたいと考えている。

才能児も特別な支援を必要としている。ギフテッドの子どもの個別のニーズに合った支援や一人ひとりの可能性を伸ばす教育が広がっていくことを願ってやまない。

<注>

- 1) アメリカ合衆国における最初の公式な定義は、1972年に米国議会に提出された「マーランド報告」の定義であった。その後、時代が経つにつれて、また州によって定義は少しずつ異なっている。
- 2) National Center for Education Statistics のウェブサイトのデータより。http://nces.ed.gov
- 3) A Parent's Guide to Gifted Children(2007) pp.14-15の表を筆者が訳したもの。
- 4) すべてのギフテッドに過度激動が見られるわけではない。なお、過度激動は精神運動性、知覚性、知性、想像性、感情性の5つの分野に分類される。日本語で読めるものとしては、松本・是永(2015)に詳しい。
- 5) なお、ギフテッドは個人差が非常に大きいので、これらの特徴がすべて見られるとは限らない。またこういった特徴があるからこそギフテッドは生きづらい、社会に適応しにくいとも一概には言えない点に注意する必要がある。環境や本人の性格にも左右される。
- 6) Minnesota Council for the Gifted & Talentedのウェブサイトより。http://mcgt.net/twice-exceptional-2e
- 7) 芸術やスポーツの才能のある子どもはタレンテッド(Talented)と呼ばれる。欧米ではGifted and Talentedと併記されることもある。
- 8) ポーター・倫子「アメリカのギフテッド教育事情」(Child Research Netに2011年11月2日に掲載された論文)やアメリカのギフテッド教育を受ける子どもを持つ親らが書いているブログ等から、アメリカのギフテッド教育に関する情報が広まった。
- 9) 松村・小倉・竹澤・石川・緩利ほか(2014)
- 10) Wechsler.D, 日本版WISC-IV刊行委員会訳編『日本版WISC-IV理論・解釈マニュアル』日本文化科学社、2010
- 11) 小泉(2014)、小泉(2016)
- 12) 杉山・岡・小倉(2009)
- 13) ギフテッドの認定方法としては、アメリカの多くの学校ではIQテスト、学力テスト、教師や親の観察やインタビュー、子どもの作品など、様々な方法を用いて総合的な判断をする。
- 14) 「渋谷区で動き出したギフテッド教育、協働する東大先端研と区長の思い」http://news.mynavi(2017.9.5)

15) 「平成29年度渋谷区 当初予算案の概要」<http://www.city.shibuya.tokyo.jp>

<主要参考文献>

- J. T. Webb, J.L. Gore, E.R. Amend, A.R. DeVries: *A Parent's Guide to Gifted Children*, Great Potential Press, Inc., Tucson: AZ, 2007
- エレン・ウィナー『才能を開花させる子供たち』片山陽子訳, 日本放送出版協会, 1998
- 小泉雅彦「読み書き困難を持つ知的ギフテッドの支援」『子ども発達臨床研究』6, 2014, pp.131-136
- 小泉雅彦「認知機能にアンバランスを抱える子どもの『生きづらさ』と教育—WISCIVで高い一般知能の能力指標を示す知的ギフテッド群—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第124号, 2016, pp.145-151
- 杉山登志郎、岡南、小倉正義『ギフテッド—天才の育て方』学研, 2009
- 中村順子、水内豊和「日本におけるGT教育の可能性」『富山大学人間発達科学部紀要』第5巻第1号, 2010, pp.161-168
- ポーター・倫子「アメリカのギフテッド教育事情」(Child Research Net掲載論文) 2011
- ハワード・ガードナー『MI: 個性を生かす多重知能の理論』松村暢隆訳, 新潮社, 2001
- 松村暢隆『アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援』東新堂, 2003
- 松村暢隆(編)「認知的個性を活かす特別支援の基礎・実践的研究—2E教育の理念で生徒の得意・興味を活かして苦手を補う」2011-13年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(研究代表者・編集: 松村暢隆、研究分担者: 小倉正義、竹澤大史、石川裕之、緩利誠、研究協力者: 小黒明日香、山地麻耶、永田康剛、野添絹子, 2014)
- 松本茉莉衣・是永かな子「ギフテッドの情緒社会面・行動面・感覚面における特別なニーズと対応」『高知大学教育学部研究報告』75, 2015, pp.13-26